

越本莉香 論文内容の要旨

主 論 文

Mental health conditions in Korean atomic bomb survivors: a survey in Seoul

在韓被爆者の精神健康：ソウル市での調査から

越本莉香、中根秀之、金賢、木下裕久、Deok Su Moon、大津留晶

Genho Bahn、柴田義貞、小澤寛樹、山下俊一

掲載雑誌名

ACTA MEDICA NAGASAKIENSIA

2011 年 8 月掲載予定

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科放射線医療科学専攻
主任指導教員：山下俊一教授

緒 言

1945 年 8 月 6 日広島、同年 8 月 9 日長崎に原子爆弾が投下され、広島と長崎の両県合わせて約 19 万 4000 人が死亡、約 15 万 8000 人が負傷した。原子爆弾の被爆者は 2007 年 3 月末の時点で約 24 万 4000 人が存在している。被爆者の中には日本国内に居住地および現在地を有せず国外に居住している在外被爆者といわれる人々が存在する。在外被爆者は 2007 年 3 月現在約 4300 人存在し、韓国在住の被爆者(以下、在韓被爆者)は約 2,930 人と在外被爆者の半数を占めている。在韓被爆者に関して、精神医学的問題に言及した報告はなされていない。そこで在韓被爆者の精神健康状態の把握を目的に実態調査を行った。

対象と方法

現在ソウルに在住する在韓被爆者を対象者とした。またソウル在住で被爆経験の無い外来通院患者を対照群とした。

対象者の精神医学的健康の状態を検討する為、Impact of Event Scale-Revised(IES-R)、General Health Questionnaire12(GHQ-12)、Korean version of short-form Geriatric Depression Scale(K-SGDS)、The Minnesota Multiphasic Personality Inventory(MMPI) K 尺度を実施した。また被爆による身体的・精神的苦痛の有無を検討する為、被爆時の状況に関して時の健康状況、被爆時の様子、被爆状況に関する情報を収集した。

倫理的配慮として、調査時に使用した質問票は個人が特定できないようにコード化されており、個人情報の保護には十分慎重に対処した。なお本研究は長崎大学医学系倫理委員会より承認を得ている。

結 果

2008 年 6 月にソウルにて行われた在韓被爆者健康相談に参加し本研究について文書にて同意を得た 181 名に調査を実施した。調査への協力率は 66.0%であった。被調査対象者 181 人のうち、回答に不備のあった者 19 名を除外した 162 名（男性 86 名、女性 76 名）を分析対象とした。対照群は 225 名に同様の調査を実施、回答に不備があった者など 36 名を除いた 189 名（男性 89 名、女性 100 名）を分析対象とした。

在韓被爆者に関して IES-R の平均点は 19.9 点($SD=14.3$)、25 点以上の高得点者の割合は 49 人(30.25%)であった。GHQ-12、4 点以上の高得点者の割合は被爆者群 78 名(48.15%)、対照群 42 名(22.2%)と有意差がみられた。リッカート法による GHQ12 の平均点は被爆者 14.4($SD=6.4$)、対照群 10.7($SD=4.3$)であった。GHQ-12 について 4 点以上の高得点者群に対しロジスティック解析にてオッズ比を検討した結果、被爆有無 3.3(2.09-5.50)、性別 1.8(1.14-2.97)、年齢(70 歳以上 or 70 歳以下)1.2(0.78-2.03)と被爆の有無が高値であった。K-SGDS では 8 点以上の高得点者の割合が被爆者 56 名(34.6%)に対し、対照群 56 名(29.6%)と有意な差はみられなかった。K-SGDS の平均点は被爆者 5.8 点($SD=4.5$)、対照群 5.0($SD=4.2$)であった。MMPIK 尺度の 20 点以上の高得点者の割合は、被爆者 39 名(34.1%)、対照群 24 名(12.7%)と有意な差がみられた。

考 察

IES-R において、カットオフポイントである 25 点以上であった人々は 30.25%、全体の平均点は 19.9($SD=14.3$)であった。長崎の被爆者に対して IES-R を行った結果では 25 点以上の高得点者の割合が 28.2%であった。日本の被爆者との比較においても得点分布はほぼ同様の結果である。以上のことから日本の被爆者同様に被爆から 60 年たった現在においてもトラウマティックストレスによる症状を呈している人が多い事が示唆された。

先行研究では長崎の被爆者に関して GHQ-12 において 4 点以上の高得点者が 8.4%であった。本研究では GHQ-12 について在韓被爆者の 48.1%と高得点者の割合が高かった。この研究結果から日本の被爆者に比べ、多くの在韓被爆者が精神健康に問題を抱えていることが示唆された。GHQ-12 の得点に影響を与えた因子について検討するため、ロジスティック回帰分析を行った。その結果、年齢や性別よりも被爆の有無が影響を及ぼしていた。被爆という強い心的外傷が、長期経過の中で精神的健康度を悪化させている可能性が示唆された。

さらに精神健康の中でも抑うつについては、K-SGDS 8 点以上の高得点者の割合は 34.6%であったことから在韓被爆者において約 4 割の人が抑うつ症状を呈している事が示唆された。

MMPI K 尺度に関して在韓被爆者において 20 点以上の高得点者は 34.1%と全体の 3 分の 1 を占めていた。MMPI K 尺度の高得点者は検査に対する防衛性を表しているといわれている。在韓被爆者は、過剰に自分の状態を悪く見せることなく、むしろ自分自身の感情を抑圧し、自分自身が心理的混乱状態にあることに気づかず生活を送っている可能性が示唆された。

本研究は在韓被爆者の精神医学的健康問題に焦点を当てた初めての研究であった。その結果、被爆後 60 年以上経ても、在韓被爆者の抑うつを始めとする精神医学的健康に問題があることが明らかとなり、その一因として被爆体験が強く影響している可能性が示唆された。今後詳細な調査を重ね、在韓被爆者の精神健康問題を検討することが必要である。